

「若者と交通」特集にあたって

久保田 尚*

「クルマ離れ」など、若者の交通の志向に変化が表れているといわれている。少子高齢化時代において、今後の若者の交通特性を見通すことは、わが国にとって重要なことであろう。本特集では、自動車免許を取り始める世代から子育て世代までを視野に置き、交通計画、社会学、交通心理学などの立場から、若者と車との関係や、若者の交通特性などについて探っていきたい。

そもそも、「若者のクルマ離れ」は本当に起きているのか、起きているとすれば、そのことが日本の社会や経済にどのような影響を与えているのか、また与え得るのだろうか。

「若者」といっても、暮らしている地域によって事情は大きく異なるだろう。多くの地方都市では、クルマ無しの生活はほとんど考えられないはずであるから、「クルマ離れ」が想像しづらい。クルマ離れしているのは、公共交通網が発達した一部の大都市の若者のことなのだろうか。それとも、地方都市においてすら、自転車などの新たなモードに転換しつつあるのだろうか。また、対象となる「若者」は、既婚・未婚や男女など、どういったカテゴリーが当てはまるのだろうか。それとも、「若者」一般にクルマ離れが進行しつつあるのだろうか。また、いったん車から離れた「若者」が若者でなくなるとき、クルマを手にするのだろうか、それとも、もはやクルマに戻ることはないのだろうか、

社会や経済への影響としては、直接的には、日本の基幹産業の一つである自動車産業への影響が当然のごとく指摘されているわけであるが、そのほかに、例えば社会学的観点からは、この問題はどのように整理され得るのだろうか。「若者の気質がこう変わったからクルマ離れが起きた」といった要因分析は

もちろん、反対に、「若者がクルマ離れすると、彼らの気質はこう変わる可能性がある」といった影響についての考察にも興味がある。

さらに、交通計画の立場からも、この問題の意味するところは大きい。過去20年近く、TDM（交通需要マネジメント）やMM（モビリティ・マネジメント）などの施策が各地で取り組まれる中で、必ずと言ってよいほど、「過度なクルマ依存から、公共交通や自転車などへの転換」が謳われてきたわけだが、若者のクルマ離れが進行していくとした場合、こうした施策の位置付けに変化は生じるのだろうか。

これらの問いに、すぐに答えを出せる人はまだ多くないであろう。本特集号では、とりあえず、さまざまな分野や視点からの座談会や論文を通して、この問いへの解答のヒントを得ることを目標としている。

特集号は、以下のように構成されている。

まず、巻頭の座談会では、歴史学や哲学をベースにしつつ若者の消費動向にも造詣の深い松田久一氏、若者のカルチャーを熟知し今後の若者像を発信し続けている鈴木謙介氏、IATSS会員でもありクルマ等のデザイナーである栗原典善氏、同じくIATSS会員であるモータージャーナリスト岩貞るみこ氏を迎え、現在および将来の若者像を明らかにしつつ、「若者とクルマ」の結び付きを現代史の中において論じ、結果として、若者と交通の今後を展望しようとした。きわめて自由な雰囲気の中で展開された議論が、結果として、このテーマの奥深さを示唆しているように思われる。

特集論文は、さまざまな分野や切り口からなる6編の論文・論説から構成される。

まず、都市工学を専門とする大森宣暁氏に、「若者の交通行動に関する一考察－ヴァーチャル・モビリティに着目して－」と題する論説をご執筆いただ

* 埼玉大学大学院理工学研究科教授
Professor, Graduate School of Science and Engineering,
Saitama University

いた。氏の個人的経験から出発し、今後の社会や技術を見据えた文化論が展開されている。

続いて、社会学者の西村大志氏には、「『若者』と『クルマ』の現在をとらえ直す－社会学的視座から－」と題して、社会学の観点からこのテーマに真正面から挑んでいただいた。『若者』とは何か、これからの『社会』とはどのようなものか、そしてそこにおける『クルマ』とは何か、深い洞察が軽妙な筆致の中で展開されている。

一転して、行政やシンクタンクにおいて交通計画に携わっている藤岡啓太郎氏、石神孝裕氏、および高橋勝美氏による「東京都市圏における若者の交通実態に関するマクロ分析－特に女性のライフステージに着目して－」は、詳細なデータ分析を踏まえた本格的な学術論文である。著者らが得意とするパーソントリップ調査のデータを駆使して、若者特に若い女性のライフスタイルと自動車利用との関係进行分析したものであり、学術的に見ても新規性や有用性に富む内容となっている。

広告業界のシンクタンクにおられる四元正弘氏は、圧倒的な情報量と洞察力を駆使して、「『若者のクルマ離れ』に関する現状分析と打開可能性」について考察していただいた。『クルマ』に収まりきれない多様な視点から若者文化について語りつつ、最後

には、『クルマ』についての具体的な提言で締めくくる内容となっている。

科警研の岡村和子氏に執筆していただいたのは、「若者ドライバーへの交通安全対策の効果に関する文献レビュー」と題する本格的なレビュー論文である。若者ドライバーの交通安全対策に関する広範な研究レビューを通して、研究分野においてもこの分野にはまだまだ多くの未開拓分野が残されていることを示しており、今後のこの分野の研究にとって大きな道しるべとなる成果となっている。

日比野直彦氏、佐藤真理子氏による「若者と旅－若年層の国内観光行動の時系列分析－」は、専門の交通計画の立場から、「若者の旅行離れ」の実態を実証的に解明しようとした意欲作であり、「若者と交通」に関する新たな切り口を提供している。

以上のように、本特集の座談会および特集論文は、工学あり社会学あり、また、文章スタイルも学術論文からエッセーまで、大変多様で個性的であり、読者の中には、あるいは戸惑われた方もおられるかもしれない。ただ、このテーマを追求するためには、こうした多面的なアプローチが不可欠と判断し、本特集号を編集した次第である。

率直なご意見ご感想をいただければ幸いです。